

出来事ファイル (No.23-5)

■演劇喫茶 元町商店街2店舗で公開

神戸市経済観光局が、昨年から実施している事業にパブリックアート事業がある。その一環として、エイベックス社の企画で「演劇喫茶」が公演された。2月25日に1番街商店街の「サントス」で10時30分から11時まで、翌26日には6丁目商店街「アルファ」で15時から15時30分まで。

神戸の日常の魅力として定着している喫茶店文化をテーマに、女優の片桐はいりさんが、珈琲を飲みながら演じるひとり芝居を、設置したモニターで来街者に鑑賞してもらうという趣向。行き交う人たちが足を止めていた。初めてのアートな試みを盛り上げるため、1番街から3丁目、4丁目から6丁目間を大道芸人のパフォーマンスも加わった。



■もとまちハーバーグリーン作戦

もとまちハーバー懇談会では4月5日(水)正午12時から、神戸駅東地域一帯のグリーン作戦を実施した。エスタシオン・デ・神戸から10名、株式会社ベルコ(メモリエイト)から7名、ネットヨタ兵庫株式会社から23名の方々の参加がありました。



エスタシオン・デ・神戸のみなさん



株式会社ベルコ(メモリエイト)のみなさん



ネットヨタ株式会社のみなさん

神戸元町商店街 楽市楽座 情報 5月

◇こうべまちづくり会館ギャラリー(無料) TEL361-4523

5月 4日(木)～5月 9日(火)木曜会作品展
5月18日(木)～5月23日(火)
倉掛喜八郎展「阪神間モダニズム」を種にして(展示は19日～)
5月25日(木)～5月30日(火)旅の写真展(第11回)

◇元町映画館(有料) TEL366-2636

4月29日(土)～5月 5日(金)「イスラーム映画祭8」
5月 6日(土)～5月12日(金)
『若者は山里をめざす』・『RRR』・『はだかのゆめ』・『食人族 4Kリマスター』
5月 6日(土)～5月19日(金)『響け!情熱のムリダンガム』
5月13日(土)～5月19日(金)
『うつろいの時をまとう』・『コペンハーゲンに山を』・『啄も囀』
5月13日(土)～5月26日(金)『Nikkatsu World Selection』
5月20日(土)～5月26日(金)『君に幸あれよ』・『にわのすなば』
5月20日(土)～6月 2日(金)『ハマのドン』
5月27日(土)～6月 2日(金)『百年の夢』・『カラヴァッジオ』・『ナナメのろうか』
【予定は変更になる場合がございます。】



栄町通クリーン作戦

栄町通まちづくり委員会は、4月14日(金)10時から10時30分まで、栄町通を中心に、ゴミ拾いと不法ビラ撤去、自転車・バイクなどへの不法駐輪警告チラシ取り付け作業など、栄町通クリーン大作戦を実施した。参加者は、(KKテクノ)白川乙葉、(神戸市)西尾俊広、(こうべまちづくり会館)木原正剛、(神明倉庫(株))大西登紀子、(神明ホールディングス)厚海徹、(兵庫県信用組合)山本周三・川村淑美・黒木省悟・谷村海帆、(三鈴マシナリー(株))野田常美、(新光明館(株))中川俊・藤田直之・西村友博・大森貴美子、(佐田野不動産(株))佐田野宏之以上、15名のみなさんでした。毎月第2金曜日午前10時、栄町通6丁目佐田野不動産前集合の上、実施しています。お気軽にご参加ください。



□読者プレゼント

観覧ご希望の方は、展覧会名と住所・氏名・年齢・本紙へのひと言を添え、本紙編集部までハガキでお申込み下さい。先着順で2名の方にペア招待券をお送りします。

◎内藤ルネ展 デビュー70周年記念特別展

内藤ルネは、今や世界中に広がる日本独自の「カワイイ」文化の原型をつくったマルチクリエイターです。デビュー70周年を記念して開催される本展では、マルチクリエイターとして、生涯活動が続けたその軌跡を仕事別に紹介。



会場:神戸ファッション美術館
TEL078-858-0050

会期:4月8日(土)～6月25日(日)

◎企画展「柿本人麿と明石」一歌・信仰・文化一



柿本人麿像(市指定文化財、月照寺所蔵)

奈良時代に宮廷歌人として活躍した柿本人麿は、万葉集に皇族をたたえる歌や死を悼む歌などのほか、明石に関する歌も残しました。千年を超えて人麿を信仰してきた人々のすがたをみつめます。

会場:明石市立文化博物館

TEL078-918-5400

会期:5月24日(水)

～7月2日(日)

みなと元町

タウンニュース

TOWN NEWS



発行:みなと元町タウン協議会 住所:〒650-0022 神戸市中央区元町通3-13-1協和会館内 発行人:奈良山喬一 編集人:岩田照彦 電話・FAX:078-391-0831

映画館のスクリーンで世界を旅する

元町映画館スタッフ 高橋 未来



ISLAM

イスラーム映画祭8

渋谷1-07A-1 / 名古屋7A7-7 / 神戸・元町映画館

Al-Makhdu'un Aala Kaf Ifrit Au-Delà De L'ombre Exils Sukkar Banat
Fatima Mayyel Ya Ghzayyel Captain Abu Raed Panj É Asr Bandhobi
Et Maintenant On Va Oû? Le Grand Voyage Sofia Le Cochon De Gaza
MAM International / Public Films / Pyramide Films / Yamase Distribution / The Festival Agency / The Open Hall / The Party Film Sales / WILD BUNCH INTERNATIONAL islamicroff.com

映画は、世界に向かって開かれた【窓】だと感じる。私は近所の散歩は好きだが元来出不精で、旅行もほとんどしない。大学在学中にロンドンで一週間を過ごした以外に異国を訪れたこともない(当然パスポートも切れっぱなしだ)。そんな私だが、香港の民主化運動のゆくえを固唾を呑んで見守り、軍政に苦しむミャンマーの人々、50年以上も軍事占領下にあるパレスチナの人々、権利や機会が急速に制限される状況にあるアフガニスタンの女性たちなどについては強く関心を持ち、心を痛め、常に情報を得るようにしている。関心を持ったきっかけはどれも映画だった。

私はテレビを持っていないのでニュースなどで彼の国の情報を知ることではないのだが、最小限の情報のみを伝えるニュースでは関心を持続させることは難しいのではと想像する。良質なドキュメンタリー映画なら、その場所で闘っている人の切なる思いや感じている痛みを、彼らの生活ごと映し出すことで観る者に訴えかけてくる。短いニュースや見出しで知った情報はスルーすることができて、映画では痛みがダイレクトに伝わるために観れば他人事だと思えることが難しくなってしまう。伝わった痛みは自分の痛みとしても記憶に刻まれる。それが「知る」ことだと思う。情報を得ただけで

は「知る」に至っていないというのが持論である。映画を観ることは、世界を知ることだ。昨今のテレビニュースでは、多くの視聴者の関心を集めるようなトピックス以外は取り上げられにくくなっている。残念ながら他国で起きていることへの関心は高いとは言えず、それらのニュースを目にされる機会も減る一方だ。それならば元町映画館では伝える機会を積極的に作ろうと、世界の「今」を知ることができ、映画をドキュメンタリーもドラマも多数上映している。

そんな取り組みの代表と言えるのが、2017年から毎年ゴールデンウィークに

開催している「イスラーム映画祭」だ。アジアからアフリカまで、国境、民族、言語を越えて広がるイスラーム文化圏を映画で旅する7日間。今年は4月29日から5月5日まで、14作品を上映する。東京、名古屋、神戸と三都市で開催されるこの映画祭は、藤本高之さんが個人で主宰している。バックパッカーとして旅して触れたイスラーム文化の豊かさと奥深さに魅了され、大好きな映画を通してその魅力を広く伝えられたらと2015年に東京でスタートされた。その後「日本最古のモスクがある神戸でも開催したい」と元町映画館にお声がけくださり現在に至っている。この映画祭でしか観られない作品も多く、神戸はもちろん大阪や京都からもたくさんの方が駆けつけてくださる人気企画だ。

藤本さんいわく映画祭のテーマは「映画を楽しみながら、世界の多様性を知るために」。知ってもらうことだけを目指しているのではなく、まずは映画を楽しんでほしいと、ラインナップされる作品のクオリティにこだわり、映画ファンからの信頼も厚い。もうひとつのこだわりは、西洋など「外部」のプロダクションが現地で制作した作品ではなく、可能な限り現地の人たちによって作られた作品を選ぶこと。内側からその世界を映しているからこそ、映画を観ていてまるで旅したような、異文化に触れる体験をもたらしてくれるのだ。

とはいえ日本人にとってなじみの深いものではないイスラーム文化。より理解を深めるため、その文化や背景について専門家を迎えてのトークセッションも行う。今年は5人のゲストによるトークを実施、トークのない日は藤本さんが自ら作品のミニ解説を行う。長引くコロナ禍で旅への思いを募らせている人も、まずは映画館のスクリーンで異文化を旅してはいかがだろうか。

海という名の本屋が消えた (114)

平野義昌

西村旅館(6)

神戸市立中央図書館にへちまクラブ発行の雑誌「金曜」全49冊のうち34冊が所蔵されている。1949(昭和24)年1月26日、創刊号発行、定価40円、A6判(文庫サイズ)。編集同人、池長孟(南蛮美術館)、川崎芳熊(元川崎重工専務、作家・久坂葉子の父)、直木太一郎(前兵庫県食糧営団理事長)、増田五良(ごろう、増田製粉所社長、文芸研究家)、松井佳一(よしいち、水産学者)、岡田利兵衛(伊丹市柿衛文庫)、長田富作(おさだ、前大阪府立図書館長)。表紙の絵は小磯良平(第6号まで同じ絵(写真))。西村貫一の名は出ていない。〈金曜日 金曜は苦難の日ともいわれ、受難更生の故を以て再建の日ともいわれている。この日をトして、集る同人、社会各界のありとあらゆる人を網羅する。来るものを拒まず、去るものはない。名づけて金曜会という。会則はないけれども、不文律はある。曰く集る。曰く話をする。聴く、生きる、楽しむ。話には研究あり、評論あり、漫談あり閑談あり、妙妙奇談もある。言葉を以て飾れば黄金のよう。光を以てたとうれば海光のよう。今やその楽しみを広く江湖に頒たんとする。ポケット用の装釘。ヘチマのような飄然たる身軽さであり、中に筋骨もある。編輯子〉

目次。「白痴録」(池長)。「よしこの節」(忍頂寺静村、清元研究)。「随想」(石橋雅義、理学博士)。「身辺十首」(小日向直登[引用者註、次号訂正「小日山」]、元満鉄総裁、明星派歌人)。「鬼貴の人間愛」(岡田)。「閑談」(長田)。長田が江戸時代の愛書家の箴言を紹介。読書中に急用があっても必ず本を閉じる、読む時・見る時手をきれいにし、香を焚き座を払い机を清める、本を捲くな、角折るな、唾つけるな、爪や字あとをつけるな、枕にするな、小破はその都度手入れせよ。「然り然り本を大事にせねば本は集って来ない」。

同年2月26日、第二号発行。「官僚の行方」(川崎)。「うさぎ」(竹中郁の詩)。「素麵覚え書」(川嶋永舟、郷土史)素麵うんちく話。「配給回想録」(直木)。「農業全書とその影響」(宮本常一、民俗学)江戸元禄期の農業指導書普及について。「滴瀝」(増田)。

増田が「金曜」発行の経緯を書く。金曜会が70回ほどになり、「只雑談に過すのは」如何かという意見あり。多くの会員は金曜会を文化事業と考えておらず、「週に1度の憩いのひと時」の認識だが、自然に雑誌発行が進む。但し「道楽にしたくない」。この号から「貴重な文献になることを期して」全巻通しのページナンバーも付けることになった。

同年3月26日、第三号発行。「南無山房冗語」(長谷川如是閑)鎌倉郊外山荘暮らし随筆。「諷刺」(東都平凡司、別名三田泉象、趣味家、我楽他宗本山)漢詩。「真珠」(松井)。「凡俗」(仲郷三郎、増田製粉所重役、歌人)短歌10首。「新しい芝居のこと」(岸田國士)新劇の魅力。「佐多紀行」(田中義磨、九州大学名誉教授、農学博士)鹿児島県佐多岬の農・漁業視察。「粉屋實記章抄」(増田)戦時下の製粉工場事情。「閑談(二)」(長田)渡来人の歴史、異民族平和共存。「目鏡」(署名・河南)「金曜」の評判紹介。賛助会員(寄付または10部以上の購読)7名氏名記載。世話人として西村貫一の名も登場。

同年4月29日、第四号発行。「蟹満寺(かにまんじ)」(内田誠、随筆家)京都府相楽郡棚倉村(現木津川市)真言宗古寺の縁起。「春の田」

(高濱年尾、虚子長男)〈春の田にはづみ下りたる鴉哉〉など全5句。「宗教団体めぐり」(佐野學、評論家、戦前共產党幹部)金光教、天理教他ルポ。「紅塵抄——諷刺調」(池長)今様10歌。他に歴史随想、社会評論。

同年5月29日、第五号発行。扉絵「南蛮屏風部分 筆者不詳」(池長提供)。「良識と瘠我慢」(町田梓樓、新聞人)高貴なる者の良識の瘠我慢。他に経済評論、漢詩、短歌、季節の随筆(「金魚」「ほととぎす」)、切支丹美術、夏と健康など。本号より編輯同人に忍頂寺務(江戸歌謡研究、号・静村)加入。牧野富太郎が「舊い記憶」寄稿。「西村」との長い縁に感謝する。1881(明治14)年高知の造り酒屋の息子・富太郎が3名が東京の第2回内国勸業博覧会に向かう。船で神戸着。陸に近づくにつれ見える神戸の山は樹木なく地肌露出、郷里の山と違い異様に感じた。長年の伐採や山火事で荒廃していた。〈……初めて神戸の地を踏んだ。そして朝食を取るために海岸に近い旅館に入ったが、それが西村旅館であった。何んでも西洋式の間で休んだように記憶している。〉

この時旅程は三宮駅(旧)から汽車で京都まで行き、徒歩で四日市、そこから船で横浜。まだ東海道線は開通していない。

第六号、奥付は「五月二十九日発行、第五號」と誤記(以後も誤記あり)。「江戸小唄の話」(東海道宿屋漫考)他、短歌、社会・経済評論など。「滴瀝」に西村邸増築のこと。〈今度西村邸内に「金曜会」のために快適な部屋が出来た。檜材の床の他は、煉瓦も窓枠も戦災の焼残物を利用し、小形の飾り煖爐もある。天井は未完だが、吾々は待ちきれず、早速この部屋に集まっている。壁塗その他の他は西村氏と池田青年その他で手づから塗り上げアーチ形入口の扉など、しゃれている。外壁にはツタやバラが這わせてあり、ドラセナやボプラが茂っている前庭の趣きとよくマッチし、エキゾチックな小風景を呈している。〉

同誌の会計報告書(昭和24年6月27日付)がある。収入の部、売上(1〜6号)計972部三万八千八百八十円、寄付金二万一千四百五円など。支出の部、印刷代(1〜5号)各300部五万三千円、執筆料4名に三千三百五十円、他送料など。「増田」の印があるので、増田五良が会計責任者。註

同年8月5日、第七号。表紙は小磯良平によるトンボ、キリギリス、蝶の絵(12号まで(写真))。初号以来の執筆者名を記載、全37名。今号の目玉は貫一の「僕と小泉八雲 八雲手簡入手の由来」。扉に書簡の写真も掲載。

八雲は旧名ラフカディオ・ハーン(1850〜1904年)、1890(明治23)年来日、新聞記者、作家、英語教師。96(明治29)年日本に帰化。

1913(大正2)年旅行先のロンドンで貫一は初めて八雲作品を読んだ。帰国後も「手当たり放題読み耽った」。八雲が神戸在住経験ありと知り、署名本を求めて古本屋を「一軒一軒風漬しに探し廻わった」。他の作家署名本は見つかるが、八雲本には出会えず。20(大正9)年頃からゴルフ書籍蒐集を開始、世界各地の古書肆約40軒から目録が届くが、八雲本は見当たらない。貫一は“Charles Rickerby,Kobe”の署名が多数あることに気づく(以下、貫一はR君と呼ぶ)。元町駅南側の古書店で入手したものだった(補註)。この頃貫一は六甲山ゴルフ三昧、夜は山荘に泊り読書。ゴルフ仲間のリネル老人にR君のことを訊ねてみると、知人だった。曰く、イギリス

人、元横浜第一銀行の支配人、1865(慶応元)年英字新聞「ジャパンコマーシャルニュース」(「日本貿易新聞」)を買収し、週刊新聞「ザ・ジャパントائمズ」を発行(1897[明治30]年創刊の同名英字新聞とは別)。独身、人嫌い、第一級の蔵書家・読者家、神戸に住んだが書齋で自殺、と言う。翌朝貫一は下山し、元町の古書店に向かう。店主に入手の経緯を訊くと、R君死後に女中さんが大量に持ち込んだものと判明。それ以上は語らず。

時は流れ、1938(昭和13)年、貫一は旧知の林権助男爵(ごんすけ、1860〜1939年、元外交官)を通じてイギリス人A・W・カーティス(以下C氏)の知遇を得る。日本滞在30年、城・武士を研究し、貫一にアドバイスを求めた。貫一もラテン語他外国語解釈について問うた。C氏は、八雲と共に日露戦争に従軍し記念に署名メモを交換した、と語る。貫一は八雲署名本探しの苦心を語り、譲ってくれるよう懇願した。C氏は探すと約束したが、なかなか見つからない。貫一の調べでは、八雲は従軍経験がなく、また日露戦争中に亡くなっている。C氏の記憶違いと思われる。C氏は、八雲が神戸の新聞に寄稿するようになったのはR君の影響、と思い出す。

また時はめぐり、1949(昭和24)年6月、金曜会で川村多實二(たみじ、1883〜1964年、京都大学名誉教授、動物学)が講演。貫一と閑談中、八雲の手紙所有と話す。義父・高木玉太郎が神戸で樟脳製造業を営み、八雲は隣人。その後文通が続いた。川村はその1通を譲り受けた。貫一は30余年に及ぶ情熱を語り、譲渡を願う。その手紙は1894(明治27)年6月28日付け、熊本発信。八雲は高木から長男の写真を贈られ感動し、著書「心」の扉に掲げたい旨、承諾を求める。〈……子供の顔を撮った写真で、コンナに立派なのは、まだ日本で見たことはありません。その美しさに、私は思わず、是は今後価値ある書物——多分少年英雄譚の扉絵にでも挿入せねばならぬと思いました。(後略)〉貫一訳。

貫一の喜びようは並大抵ではない。ご先祖にも感謝する。〈蒐集家の許に名品が集るのは、かくの如き自然な径路で這入るのである。富士山頂上に登るが如しとでも云うか、一步一步絶えざる努力、心懸け、熱意のたまもので、人智の致すところでないことを深く感ぜしめられると云うものだ。(後略)〉

写真 「金曜」創刊号(右)と第七号表紙。

註 へちま倶楽部編『へちま倶楽部会則及名簿』の挿入メモ Web近代書誌・近代画像データベース(大阪大学附属図書館・小野文庫) <http://school.nijl.ac.jp/kindai/OSON/OSON-00342.html#1> 補註 1939(昭和14)年頃の古書店地図、元町駅南側に5軒並んでいた。『神戸の古本力』(みずのわ出版、2006年)より。引用文は新字・新かなに直した。



みなとMOIOMACHケンチクさんぽ vol.22

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部

兵庫地域会 地域まちづくり委員会

多様な文化がひしめき合って共栄するまち

元町 4 丁目にあるこうべまちづくり会館を日ごろよく利用させてもらっていることから、元町商店街なども見慣れた景色になっています。ここ数年、コロナ禍の影響もあって対面での会議はほとんどリモートで開催。この記事を書かせていただくにあたりハーバーロードから鯉川筋まで元町を縦横に歩いてみることにしました。

この町は、東西方向には東の鯉川筋から西のハーバーロードまでの間に 9 つの通りと、南北方向には南の国道 2 号線から北の県道の間には 4 〜 5 つの通りからなっています。それぞれの通りは似通っていてもブロック毎には独自の景観があり文化を持ち合わせていると思います。

東西方向の通りについて言うと、元町商店



商船三井ビルディング

ポートアイランドから見た元町
(筆者の水彩画)

海岸通の風景

当時の写真を元に描いた飾磨県庁舎
(CG アトリエフォルム)

兵庫県にはもう一つの元町があり、県庁舎が存在していました。

元町と名の付く町は日本全国有名なところにあります。横浜市の元町、金沢の元町など。神戸と横浜が元町と呼ばれたのは、神戸は明治 7 年 5 月 2 0 日(1874)で、横浜が万延元年(1860 年) 2 月で少しだけ横浜の方が古いことになります。

私は姫路で建築設計事務所を主宰しています。事務所の所在地は西新町で姫路城の西南にあり、古くは「元町」と呼ばれていました。姫路の元町も東西に長く、神戸の元町と同じく旧西国街道が町の中央を貫いています。ですから、「元町」の地名は、横浜や金沢、神戸や姫路と考え合わせれば県庁所在地に存在するとして私は漠然と感じていました。

姫路の元町には僅か7日間でしたが飾磨県の県庁が存在していました。現在の兵庫県を形付けるエリアは飾磨県と豊岡県(但馬、丹波)、名東県(阿波および淡路全域)と兵庫県の 4 カ国です。明治4年から明治政府に訴えていた飾磨県の新庁舎建設が明治8年4月4日に紆余曲折の末、受け入れられました。その時の建設費を大久保利通は官費三分の一、地元献金三分の二を充てるのが妥当と裁定しています。

飾磨県庁舎は、玄関を前面に張り出し、その上に菊のご紋章を冠した三角形のペディメントを戴く。主屋の中央には八角形の望楼を載せ、

街は旧の西国街道であり、アーケードに覆われ商業の軸軸です。一方、栄町通りは道路の幅が広く域内交通の軸軸であり、沿道はビジネス街で比較的高さの揃ったビルが列をなし、景観をつくっています。南の浜手幹線は通過交通の主幹線です。南京町はということで、観光客は多くコロナ禍前の賑わいを取り戻したようです。

この町のキャッチは「高級・ハイカラ・エレガンス」です。私は趣味でハガキ大の水彩画を描いていますが、キャッチと同様にこの町をとらえ、以前から絵になる風景として栄町通りや海岸通り(浜手幹線)にある歴史的建造物を絵の対象として描いています。この度改めて町を歩いたことで普段見過ごしていた風景の中に面

白く感じたことがあります。町全体がモンドリアンの描くグリッドパターンを用いた「コンポジション」の如く区画されていないが、趣の異なる風景が隣接し溶け合っている。さながらキュビズムでありモザイクとも言える町の風景が存在します。そこには高級やエレガンスだけでは括れないわくわく感あり、元町の多様な文化がひしめき合って共栄する姿が見え隠れしていて楽しく思えます。

今どきの行列のできる店舗の出店や、時代と折り合わなくなった店舗の撤退は、どの商店街でも日常的といえますが、一方でこの町に根をおろし頑張ってきた老舗の店舗の閉店はいささか寂しい気がしました。特に、となりの頁に連載されている海文堂や、丸善神戸支店は専門書の書店としてよく利用していましたので、ひとしおです。

当時の写真を元に描いた飾磨県庁舎
(CG アトリエフォルム)

置塩章でした。歴史の転換期に大きな制度改革で翻弄され、人々の生活は大きく様変わりしました。この時代の建物や街並みは和と洋が刺激を受けながら、混在した文化として今に伝わっています。姫路における歴史を、建物や街並みの写真で記録し続けた高橋秀吉氏(1899〜1979)のコレクションが兵庫県立歴史博物館にあります。その中でわずか 1 枚ですが、正面から撮った飾磨県庁舎が写っています。

この写真を掲載しても良いのですが、明治の現存しない飾磨県庁舎と、明治大正の建物で現存する元町の歴史的建造物を、絵で括りたいとの思いで、弊社で描いた飾磨県庁舎のCGを掲載させていただきます。

震災で、或いは経済的な理由で壊され姿を変えていった幾多の建物もありますが、日本の近代化を促進し原動力ともなった数々の歴史的建造物がここ元町にはたくさん存在します。絵を描く私から言わせてもらえば、いろいろな意味で、混じりあう文化の面白さを持ち合わせたみなと元町と姫路の元町は、とても魅力的で絵になる風景だと思っています。



吉田文男 (よしだふみお)

(尚)一級建築士事務所アトリエフォルム
ファッション・ハウジングデザイン学科
代表取締役会長／姫路市西新町101-1
日本建築家協会近畿支部兵庫地域会
監査／近畿支部副支部長